

縄文時代とか古墳時代などの大昔ばかりを扱う学問と思われがちな考古学。でも最近ちょっとだけ前の「昭和」（1926～89年）の時代の遺跡を発掘する例が増えつつあります。集落の跡や繁華街の跡、ハンセン病患者を監禁した施設など……。遺跡は何を語ってくれるのでしょうか？

戦争の記憶 形で残す

沖縄 ひめゆり学徒隊

沖縄県中部の西原町にある県立埋蔵文化財センター。記者が訪れた日、その企画展示室で県内の10市町村との合同企画展「掘り出された戦前の沖縄」が開かれていました。並べられていたのは、1879年の琉球処分が始まる近代から現代の遺跡で見つかった陶磁器や日用品など。中でも米軍が1945年6月に接収して普天間飛行場を建設した神山古集落(宜野湾市)からは、2017年に県が行った調査で、村で使われていた陶器の皿やガラス瓶、鉄鍋、硯、歯ブラシなどのほか、防空壕の中で炭化した豆類や布などが出土しました。展示を担当した同センター主任専門員の瀬戸哲也さん(43)によると、神山古集落はずっと米軍基地の中にあり、古い集落の姿が荒らされないうまま残されていたと言います。陶磁器を隠そうとした穴が見つかるなど、直前までの人々の暮らしぶりも手にとるようにわかるそうです。「戦争で大きな被害を受けた沖縄には、本土のような古い建物などの文化財が少ない。00年代以降、米軍の基地返還などに伴って県内の近現代の遺跡の発掘は増えており、今回の展示が、各自自治体がこつこつ調査してきたそんな新しい時代の遺跡を知るきっかけになれば」

同センターでの展示は12月1日で終了しますが、沖縄市、うるま市、名護市などでの連携展は来年1月～2月まで開かれています。そんな沖縄県は、全国に先駆けてアジア・太平洋戦争の遺跡が文化財に指定された場所でもあります。同県南風原町にある沖縄陸軍病院南風原壕群。沖縄戦の末期に高等女学校などの生徒や教師から構成される「ひめゆり学徒隊」が働いていたことで知られる同壕群を、南風原町は90年に町の史跡に指定しました。同町文化センター学芸員の保久盛陽さん(29)は「沖縄戦の経験者が次第に少なくなっていくなか、『戦争の記憶を何とか形で残したい』との思いがあったと聞いています」と話します。

壕のうち、保存状態がよかった20号を発掘調査し、補強を施して2007年に公開。現在では県内外から年に約1万人の見学者が訪れます。内部には米軍の火炎放射で焼けたと考えられる杭木が残り、迫りにシヨックを受ける子供がいたほど。解説にあたっては南風原平和ガイドの会の仲間孝蔵さん(76)は「陸軍病院の撤退時、重病で自分で動けない兵士には青酸カリ入りのミルクが配られました。戦争の悲惨さを知ってもらうためにも、このような戦争遺跡をきちんと保存していけないといけない」と話してくれました。

被爆後の物も 1300箱分出土

広島 平和記念公園

町の中心街が発掘された例もあり。世界遺産に登録されている原爆ドームが残る広島市の広島平和記念公園。その一角にある広島平和記念資料館本館では、建物の耐震工事に伴って、2015年秋、館の地下部分の発掘調査が行われました。同館周辺は戦前、材木町と呼ばれた地区で、広島でも有数の繁華街。85m×25mという限られた範囲の調査にもかかわらず、数多くの建物跡と遺物収納ケース1300箱分の大量の遺物が出土しました。

発掘を担当した広島市文化財団学芸員の榎木太さん(45)によると、遺跡の年代は広島城築城当時の16世紀から原爆が投下された直後の45年8月にまで及び、被爆直後の遺構が確認された面からは、被爆直後の火事で焼けたしゃもじや、溶けた牛乳瓶などが見つかったといえます。「発掘範囲内では、戦前の住宅や銭湯、墓地、防空壕などが確認されました」と榎木さん。中でも、住宅の地下にあたる場所からは、ビール瓶が中身が入った状態で見つかったり、側溝の中からは土を踏みしめたネコの足跡が見つかったりと「被災直前まで戦時中の普通の暮らしが営まれていた様子が感じられた」といいます。広島市が明治時代より新しい遺跡を発掘するのはこれが初めてで、18年には、平和記念公園は近現代遺跡

の包蔵地として周知されました。このため、平和公園内に関しては、今後も工事などが行われるたびに現代までの遺跡が発掘調査されることとなります。広島市は公園内のレストハウスの増築工事などに伴い、今年も公園内2カ所を発掘しており、被爆直後の住宅跡などが見つかりました。平和記念資料館の地下と同様、工事の関係で遺跡の保存はかたがたでしたが、来年7月にオープン予定のレストハウス内に、戦前の町並みの写真や出土遺物を見てもらうコーナーが設置される見込みです。

記録されぬ差別 実態明かす 群馬 ハンセン病療養所

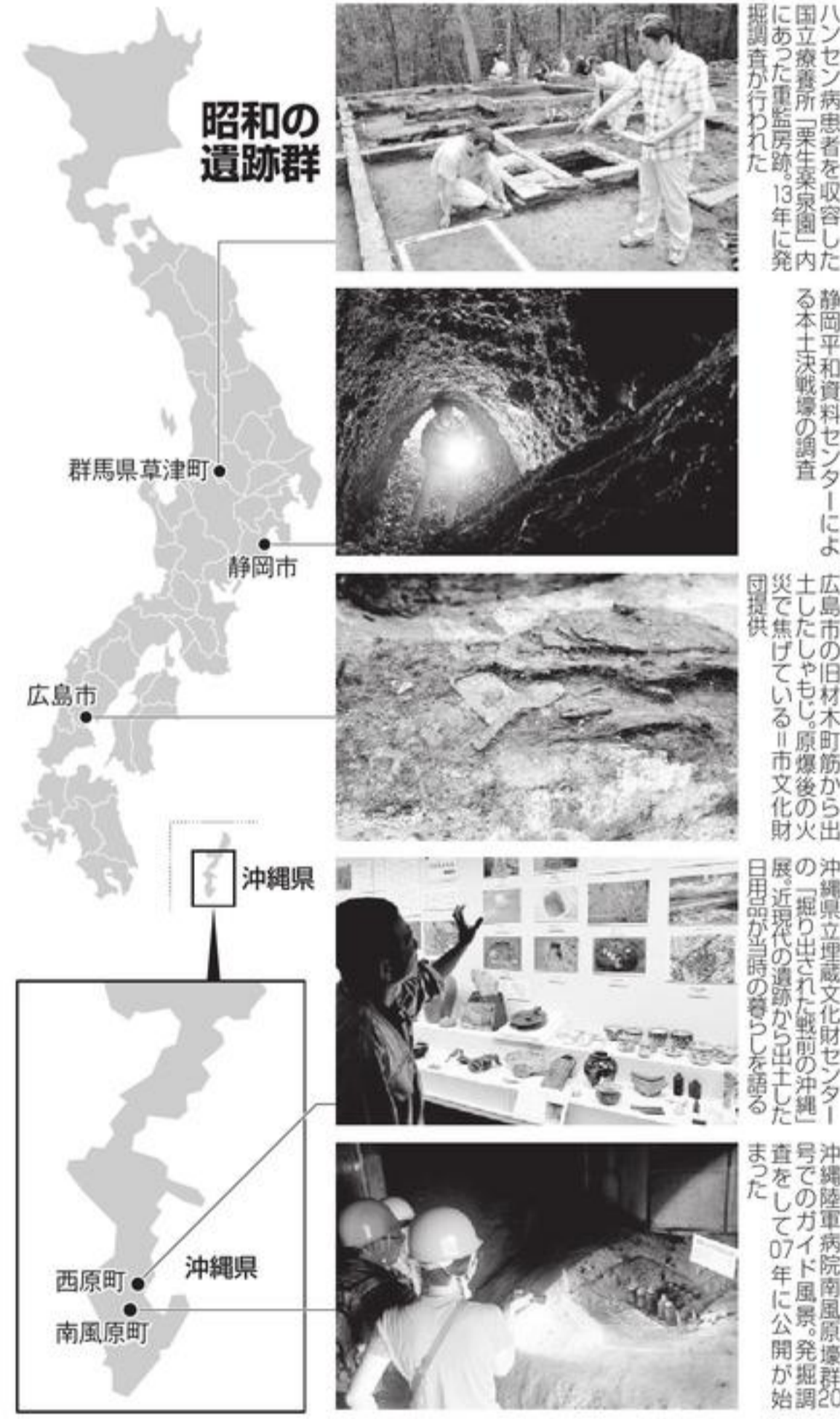
発掘は文献からではわからなかった事実も明らかにしてくれま。群馬県重監房から出土した南京錠(重監房資料館提供)立ハンセン病療養所「栗生楽泉園」内で13年に行われた重監房跡の調査もそうでした。重監房は、38年に設置された懲罰用の建物です。「特別病室」と称しながら治療などは行われず、反抗的とか問題があるとかみなされた患者が入られました。部屋にはガラスのない小さな窓のみ。暖房もなく、47年に廃止されるまでの9年で93人

が収容され23人が亡くなったといわれています。しかし、廃止後すぐに取り壊されたため、建物の構造や収容者たちの暮らしぶりについては、わずかな証言以外、ほとんどわかっていませんでした。そこで、その実態を知るために行われたのが発掘調査です。厚生労働省が14年に設置し、現在は日本財団が運営を委託されている重監房資料館館長の黒尾和久さん(58)によると、現地には基礎しか残っていませんでしたが、土を少しずつ除去していくうちに、様々な事実がわかってきました。個々の病室を囲む壁は鉄筋コンクリート製といわれてきましたが、強度の低い木骨モルタル製だったこと

がわかりました。また、建物の床を支える束柱も礎石を伴わず、柱を直接地面に打ち込んだものでした。くみ取りトイレでは、弁当箱や梅干しの種に混じって、牛乳瓶や牛の骨などが混じりました。食事は飯と梅干しだけと言われた重監房で、収容者が別途差し入れなどを入手して生き延びようとしていたことがわかりました。扉の外からかけられた各種の南京錠も見つかり、監禁の実態に光が当たりました。「証言が裏付けられたり、新事実が明らかになったりしました。記録されなかった、あるいは記録が廃棄された歴史を知るうえで発掘調査は時代を問わず極めて有効な手段だと思います」と黒尾さんは話します。

昭和の遺跡をめぐる動き

Table with 2 columns: Year and Event. 1990年 沖縄県南風原町が沖縄陸軍病院南風原壕群を戦争遺跡として初めて文化財指定. 97年 戦争遺跡保存全国ネットワークが発足. 2005年 山梨県南アルプス市がロタコ(御使河原飛行場跡)の発掘調査開始. 07年 沖縄陸軍病院南風原壕群が一般公開. 10年 沖縄県が5カ年計画で戦争遺跡の全県調査開始. 13年 ハンセン病患者を収容した重監房跡の発掘調査実施. 15年 広島平和記念資料館地下の旧材木町筋の発掘調査実施. 17年 静岡平和資料センターが日本平(静岡市)の本土決戦壕の調査開始. 福岡県が戦争遺跡の全県調査開始. 神山古集落(沖縄県宜野湾市)の発掘調査始まる. 18年 豊川海軍工廠平和公園(愛知県豊川市)が開園. 「山の中の海軍の町にしき ひみつ基地ミュージアム」(熊本県錦町)が開館. 19年5月 広島平和記念公園内で旧中島地区の発掘調査実施. 10月 沖縄県内11カ所で行われた戦前の沖縄展が開幕.



戦争遺跡 広がる保存運動

静岡・熊本・宮崎・愛知...



宮崎市で11月に開かれた「空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会」。豊川海軍工廠平和公園(愛知県豊川市)でボランティアガイドの説明を聞く小学生

このような昭和の遺跡の調査や保存には専門家ではない普通の市民が、大きな役割を果たしています。静岡市にある静岡平和資料センターでは2017年から、アジア・太平洋戦争末に同市に構築された「本土決戦壕」の調査を実施してきました。同センター事務局長の土居和江さん(73)は「うちでは空襲証言の記録などを主に行ってきたのですが、そうしているうちに壕がどんどん崩れていく。最低限のことだけでもおさえておきたかった」と話します。現地調査の結果、二十数カ所の壕を確認。工事に携わった人の証言も交え、今年5月まで展覧会を開き、いま最終報告をまとめています。調査成果の発表や議論なども盛んです。11月中旬に宮崎市で開かれた「空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会」には各地から約40人の団体代表や個人研究者が集まり、「戦争遺跡調査をして学んだこと・伝えたいこと」などのテーマで発表や討論を行いました。くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークの高谷和生さん(65)は「交流会も6回目。九州・山口地区には旧陸軍の飛行場が多く造られたこともあり、飛行機を収容した掩体壕などの調査や遺跡の保存運動が盛んに行われています」と話します。参加していた宮崎県歴史教育者協議会事務局長の福田鉄文さん(81)は「地元・日向市の戦跡調べから始め

て全県下の戦争遺跡を調査した。戦争は人やものを総動員して行われる。事実を調べ、遺跡を後世に残すことで、戦争を二度と起こさぬようにしたい」と話してくれました。実際、愛知県豊川市で昨年6月に開園した豊川海軍工廠平和公園のように、豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会などの市民運動がきっかけで、自治体が昭和の遺跡の保存に踏み切った例は少なくありません。戦争中に使われた火薬庫などが保存された同公園には昨年度だけで約5万人の入園者があり、市内の小学生の学習活動にも活用されています。戦争遺跡の保存運動は全国に広がっており、1997年に設立された戦争遺跡保存全国ネットワークには40近い団体が名を連ねます。同ネットワーク共同代表の出原恵三さん(63)は「戦後74年がたち、戦後世代が戦争の悲惨さを語り伝える時代になっている。全国に残る戦争遺跡は5万件といわれるが、明治以降の遺跡については位置づけがあいまいで、多くは消滅の危機に瀕している。遺跡に何を語らせ、そこから何を学ぶのか。戦争遺跡を含む身近な昭和の遺跡は、私たちの歴史の扉になり得ると思う」と言います。北九州市で近代の弾薬庫の発掘を行った市芸術文化振興財団学芸員の安部和城さん(27)も「考古学が物語る歴史の範囲はまだ拡大できると思う」と話してくれました。

時代が新しくても先祖の痕跡

文化庁によると、埋蔵文化財の存在が知られている場所は全国で約46万カ所あり、年に約9千件の発掘調査が行われているそうです。しかし、今回紹介した「昭和の考古学」を実践する自治体や研究者は、沖縄県をはじめ、まだまだ少数。明治時代から始まる近代の遺跡についても、よほど特別な事情がない限り、「発掘の必要は認められない」とみなされ、未調査のまま破壊されているのが実情です。誤解されることが多いのですが、考古学は、遺跡や遺物を研究する学問であり、本来、その対象とする時代を特に限っていません。昭和も元年から数えれば90年以上が過ぎ、一般に文化財として認められる目安とされる50年をとうに超えました。また、遺跡からしかずい取るのができない「記録に残っていない情報」「記録に残されなかった情報」というのは、私たちが考えている以上に多いのです。戦前を知る人はやがていなくなります。であれば、遺跡こそが当時の暮らしぶりや出来事を語ってくれる、重要な永遠の証人とさえいえないでしょうか。時代が新しくあろうと、すべての遺跡は、私たちの先祖が残した営みの痕跡です。手間や経費の問題はあると思いますが、昭和の遺跡の発掘調査やその保存・活用は、より積極的に行われるべきだと私は思います。(編集委員・宮代栄一)

来週8日は「駅で困ったこと、ありませんか？」を掲載します。

生きづらさを感じた時の居場所を考える「『9月1日』後、どうしてる？」と「駅で困ったこと、ありませんか？」の二つのアンケートをhttps://www.asahi.com/opinion/forumで実施中です。ご感想、ご提案はasahi_forum@asahi.comへ。